

福祉教育開発センターシンポジウム 「平和と福祉」事前学習会 「戦後 70 年を駆け抜けたソーシャルワーカー」 序 文

泉 洋 一

〔抄 録〕

本稿では、戦後 70 年を迎えての福祉教育開発センターシンポジウムの企画意図とともに、テーマ「平和と福祉」への視点を深めるための事前学習会について概説している。また、福祉教育における「平和と福祉」への問題意識の形成が日本の福祉教育・専門職養成だけでなく、世界的なソーシャルワーク専門職養成の課題であることを提起した。

なお、事前学習会は、糸賀一雄らの発達保障論の源流を学ぶことで「平和と福祉」への視点や問題意識の形成を促し、療育活動の記録映画や経験豊かなソーシャルワーカー（福祉労働者）との対話を通じて、福祉思想の次世代への継承を試みた教育実践である。

キーワード 平和と福祉 糸賀一雄 発達保障 ソーシャルワーク専門職のグローバル定義

1. はじめに

2015 年は第二次世界大戦の終結以来 70 年という節目にあたる。福祉教育開発センターは、戦後 70 年にシンポジウムのテーマを「平和と福祉」に設定した。それは『戦争』と『福祉』は相反するものであり、福祉の発展は『平和』の基盤があってこそなし得るもの¹⁾との共通認識から生成されたものである。

今年度の福祉教育開発センターシンポジウム（以下、シンポジウム）は、10 月 24 日に実施するシンポジウムに先立ち、7 月に原爆展、8 月に沖縄平和スタディツアー、9 月に 2 度の事前学習会を実施した。これら一連の企画の成果は、シンポジウム報告書に譲ることにして、ここではシンポジウム事前学習会の企画意図と内容について述べる。

2. 事前学習会の企画意図について

事前学習会の主たる対象は学生であり、シンポジウム「平和と福祉」への視点の形成と思考の発芽を促すためには、事前学習の場を提供する必要があった。それは、発達保障論が形成された糸賀一雄らの実践から戦後 70 年の福祉の歩みを学ぶことで、学生自身が平和と福祉の実現に必要な社会の在り方を考える契機とするためでもある。戦後 70 年を迎え、再び戦争国家

の道を歩むことが危惧される今日。福祉実践の源流から私たちが平和と福祉について何をすべきかを考えることが何より重要と思われたからである。

身近な関西での福祉実践を考えたとき、戦後70年間を通して福祉実践の実績があり、なおかつ「平和と福祉」に合致する福祉思想を形成してきた福祉現場は希有であり、糸賀一雄らを除いては皆無であることも発達保障論に焦点を当てる動機となった。

糸賀一雄が『福祉の思想』で訴えた発達保障の考え方は、戦中・戦後の混乱期から高度経済成長期までの近江学園やびわこ学園での福祉労働から生まれたものである。それはまさに障害のある子どもたちと福祉労働者（ソーシャルワーカー）との「共生」によって育まれた福祉の実践思想とも言える。今日の障害者福祉の実践の根底にある発達保障の源流を辿り、先人たちの平和と福祉への思いを受け継ぐ機会とする意図があったのである。

また、それは今日の福祉教育、とりわけ社会福祉専門職（社会福祉士や精神保健福祉士）の養成カリキュラムの中に発達保障が位置づけられていないことへの危惧から、専門職養成へのアンチテーゼという意味を持つ。

一方、国際的な社会福祉専門職（ソーシャルワーカー）養成において、ソーシャルワークなどの方法論が重視され、「平和」という人類福祉の共通基盤を支える思想や理念が脱落しつつあることへの危惧もある。それは国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）と国際ソーシャルワーク学校連盟（IASSW）によって、2014年7月に採択された「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」²⁾をみても明らかである。定義では、社会変革や社会開発、社会的結束、人々のエンパワメントと解放などのソーシャルワーク実践と、社会正義、人権、集団的責任、多様性尊重などの原理はあるものの、「平和」という文言は一字も見当たらない。

多くの犠牲を払った第二次世界大戦への深い反省から生まれた「国際連合憲章」（1945年）や「世界人権宣言」（1948年）とは異なり、戦後70年の福祉教育の歩みが「平和」との乖離を生みつつあるのではないかとの問題認識がシンポジウム事前学習会の企画の原動力となった。

3. 発達保障を学ぶための学習

シンポジウム事前学習会は9月13日に第1回、9月26日に第2回を実施した。いずれも週末であるにもかかわらず参加者に恵まれた³⁾。

第1回事前学習会は、「映画『夜明け前の子どもたち』鑑賞と学びの集い」と題して、糸賀一雄らのびわこ学園での実践を切り取った記録映画「夜明け前の子どもたち」⁴⁾（1968年）の上映、そして非常勤講師の山田宗寛氏（社会福祉法人グロー）と筆者による座談会「糸賀一雄と仲間たちの実践から生まれた発達保障」の二本立てで実施した。

映画「夜明け前の子どもたち」は、2013年にデジタル化されたため映像も鮮明で、116分という上映時間を忘れるほど内容の濃い記録映像であった。重症心身障害児施設びわこ学園の日

常生活の中での福祉実践（療育）の有様を描き、職員と障害のある子どもたちとのかかわりから生まれる援助関係とは何かを考えさせられるとともに、根気強く働きかけをすることで子どもたちに変化が生まれ、療育が発達を促すことを立証した科学的側面を持つ映画である。

また、座談会では山田氏が近江学園の設立と発達保障論の形成過程を概説。糸賀一雄や池田太郎、田村一二らによる福祉実践の出発点には、第二次世界大戦への深い反省と、顧みられることのない戦争孤児や障害のある子どもたちへの教育と福祉の思想が裏打ちされていたことを解説された。なお、座談会では近江学園の記録映像「一次元の子どもたち」⁵⁾（1965年）の短縮版が上映された。近江学園の初期の実践を映像で確認できる貴重な時間となった。

第2回事前学習会では、近江学園の元職員・岡山喜久治氏を迎え、同上の山田宗寛氏と卒業生の清水紗織さん（社会福祉法人しが夢翔会ステップ広場ガル）とともに「戦後70年を駆け抜けたソーシャルワーカー」をテーマに座談会を実施した。

ゲストの岡山喜久治氏は、近江学園が設立されて間もない1948（昭和23）年に職員となり、糸賀一雄や田村一二、池田太郎らの影響を受けて成長した福祉労働者（ソーシャルワーカー）である。

本座談会の企画段階で、筆者は山田氏や清水さんとともに岡山氏の自宅を訪問し、ライフヒストリーを聞く中で、岡山氏の障害のある子どもたちへの深い造詣と平和に対する信念にふれることができた。また、糸賀一雄や田村一二、池田太郎などの障害者福祉の先人が辿った福祉労働の道すがら、まさに平和と福祉の実践を体現したものであることを岡山氏の語りから学ぶことができた。

第2回事前学習会の方法は、打ち合わせの段階で岡山氏による単独講演という形式ではなく、当時の障害のある子どもたちの生活や職員の実践の有様について、岡山氏を囲みながら座談会で話を伺うことになった。また、座談会の柱を①戦時中の体験（学徒動員）、②近江学園に就職した頃、③落穂寮の立ち上げと実践、④近江学園に戻ってきた頃、⑤福祉実践でどのようなことを大切にしてきたのか、⑥糸賀一雄先生の人物像という6つに設定し、清水さんからの質問に岡山氏が答え、山田氏が補足説明をすることになった。

なお、岡山氏からは1967（昭和42）年～1968（昭和43）年当時の所蔵写真とフィルムを預かり、フィルムをデジタル化した上で会場のバックスクリーンに映写することも提案された。このような準備を経て、参加した学生が戦後の混乱した状況が理解でき、とりわけ障害のある子どもたちの暮らしの状況や職員の働く様子などがわかるように、映像や資料を使いながらの学習会となった次第である。

4. 岡山喜久治氏について

ここで岡山喜久治氏の略歴を紹介しておきたい。

岡山氏は1926（大正15）年生まれで89歳になられる。戦時中は、福知山工専から学徒動員

で舞鶴の海軍工廠へ赴き、海軍の造船工場でエアハンマーを使う過酷な労働に従事⁶⁾。戦後、田村一二の紹介で1948（昭和23）年から近江学園で働くことになる。

しかし、その2年後には糸賀一雄園長から請われて、重度知的障害児のための「落穂寮」開設に携わる。この頃、岡山氏は「落穂寮」の子どもたちの絵画を世に知らしめた「知恵のおくれた子らの作品展」（1955年、東京・東横百貨店）を開くなど、精力的に障害のある子どもたちの芸術創作活動に着目し、社会に開かれた活動を模索している。この取り組みは美術専門誌『美術手帳』⁷⁾にも紹介された。



岡山喜久治氏所蔵

また、1958（昭和33）年からは糸賀園長の依頼で「名張育成園」（知的障害児者の親の会である「全日本精神薄弱者育成会」が設立）の開設に従事される。

なお、1966（昭和41）年から1968（昭和43）年まで糸賀園長からの再度の依頼により近江学園に復帰。発達保障の思想と実践をつなげる福祉労働のキャリアを深めていった。

その後は、滋賀県立しゃくなげ園、びわこ学園、唐崎やよい作業所などの障害者福祉の第一線の現場で実践を積み重ねてきたソーシャルワーカー（福祉労働者）である。

なお、糸賀一雄の講演録を収載した『愛と共感の教育』（柏樹社、1972年）第2章「共に生き、共に歩み、共に育つ」の薪割りの場面で、岡山氏の仕草を真似る障害児の様子が紹介されている。当時の障害のある子どもたちとのかかわりを伺い知ることのできる秀逸なエピソードといえる。

また、近江学園での実践は2007年に出版された『要求で育ちあう子らー発達保障の芽生え 近江学園の実践記録』⁸⁾に紹介されている。

5. 特集論文と座談会の記録

本特集に合わせて山田宗寛氏からは次稿の「糸賀一雄らの福祉層の今日的な実践とその意義についてー浮浪児・戦災孤児と児童虐待問題を考察して」を寄稿いただいた。糸賀一雄らの福祉の実践と思想の形成過程には、戦中戦後を生き抜いた子どもや障害のある人の要求をもとに施設や制度を創設した経緯があること。そして、今日の福祉課題に向き合う時に改めて糸賀思想が社会指標となり得ることを論じている。

また、特集の締めくくりには、第2回事前学習会の座談会の全容をとどめた記録を掲載した。座談会については、進行役を引き受けた筆者の力不足もあって、岡山喜久治氏の豊富な経験と知識を十分に引き出せたかどうか自信が持てない。岡山氏の語りは力強く、極めてシンプルである。障害者福祉の実践モデルとなった近江学園や落穂寮などでの実践は、福祉制度や社

会資源のない中で、実践を通じて施設や制度を作ってきた世代の使命と自負⁹⁾を感じ取ることができる。また、福祉の実践は平和そのものであり、その平和を守るためには福祉の思想を社会に伝えていくことが不可欠であることを学んだ。岡山氏が紹介した糸賀一雄の言葉「情熱を持ったものが歴史をつくる」とともに、福祉教育の実践に生かしていくことが私たちの使命でもあるだろう。

注

- 1) 福祉教育開発センターシンポジウムのワーキングによる議論を経た上でのテーマ設定である。
- 2) 「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」は、2014年オーストラリア・メルボルンで IFSW および IASSW の総会で採択された。なお、その前身である「ソーシャルワークの定義」は、2000年7月にカナダのモントリオールでの IFSW 総会で採択されているが、同様に「平和」についての言及はない。
- 3) 9月13日の第1回事前学習会は38名、9月26日の第2回事前学習会は82名、計120名の参加が得られた。
- 4) 映画「夜明け前のこどもたち」は、柳澤寿男監督による長編記録映画であり、田中昌人氏の技術指導のもと制作された。制作当時のパンフレットには次のように紹介されている。「知的障害児の父と言われた故糸賀一雄先生の監修の下に、先生ゆかりの施設びわこ学園における重症児の療育活動を撮影記録したものです。スタッフは学園に泊まりこみ、重症心身障害児とその療育活動について徹底的に学習し、その上で、計画を立て撮影するという繰り返しを、一年近くも続けました。それだけに学園の専門職員も驚く程の新事実の映像が焼き付けられていました」
- 5) 近江学園の実践を記録化した「一次元の子どもたち」は東京12チャンネルにより1965年（昭和40）年に制作された。
- 6) その後、陸軍に招集され、静岡県陸軍基地での訓練中に終戦を迎えることになるが、軍隊での兵隊間のいじめや虐待行為を目の当たりにしたという。しかし、そのような過酷な兵役を支えたのは信仰（キリスト教）であった。信仰が心の支えになったという点では、糸賀一雄の歩んだ道と共通している。
- 7) 岡山喜久治（1955）「絵を描く落穂寮児の歩いてきた道」『美術手帖』臨時増刊95号「ちえのおくれた子らの作品」美術出版社、43
- 8) 田中昌人・「要求で育ちあう子ら」編集委員会（2007）『要求で育ちあう子ら ―発達保障の芽生え 近江学園の実践記録』大月書店
- 9) 岡山喜久治氏からの書簡には、「仕事はもちろん、友人とのつきあい、施設の運営などについても、自分を律し、自己の確立形成が何より大切である」と書かれていた。福祉の先達からのメッセージと受けとめ、日々の実践に生かしていきたいと思う。

（いずみ よういち 福祉教育開発センター）

